

# リオでサンバを踊る

近藤 節夫 (エッセイスト)

だいぶ昔のことだから最早時効と思いたいが、いくら酒を飲んだ勢いとはいえ、よくぞサンバの本場で並みいるブラジル人の前で、恥ずかしげもなくサンバを踊ったものだと自らの若気の至りに、今振り返っても恥ずかしく冷や汗が出る思いである。

そもそもサンバとは、アルゼンチン・タンゴや、キューバのルンバとは似て非なるもので、2ビートのリズムに乗り、通常セミ・ヌードの女性が腰を振りながら踊るブラジルならではの情熱的なダンスである。

リオ・デ・ジャネイロに住んでいたブラジル人の

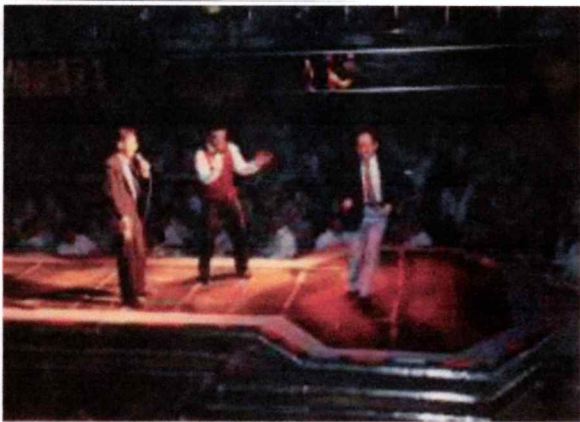
彼は、時間があると世界中を旅していた。そんな彼からぜひブラジルを訪れるよう、しばしば急き立てるような手紙をもらっていた。

地球の反対側ブラジルの地に足を下すのはこれで2度目だったが、以前にアマゾン奥地などを訪れてスケールの大きいブラジルの魅力の虜になっていた私を、リオ空港で見つけるや、彼は走り寄り抱きかかえるようにして出迎えてくれた。

その翌日のことだった。コルコバードの丘の巨大なキリスト像や、コパカバーナ海岸を案内してくれた夕べに、彼が豪華なディナーをご馳走してくれた。世界的に知られたブラジルの名物肉料理「シュラスコ」に舌鼓を打ち、ワインと地元の国民酒である蒸留酒「カシャッサ」を存分に味わった。お互いに久しぶりの再会で話と料理に夢中になり、少々足元がふらつくほど酔いしれた。飲むほどに酔うほどに時が過ぎるのを忘れるほどだった。3時間近くも食べつくし、飲みつくしてそろそろお開きにしようかなと思っていたところ、彼はこれから本場のサンバ・ショーを楽しんでもらいたいと、リオでも有名なサンバ・シアターへ案内された。

そこで衝撃的な「事件」が起きたのである。サンバ・ショーの第1部が終わって休憩になった。すると1人の司会者らしき男がステージに登り、満員の観客を見回しながら、どなたかこのステージでサンバを踊りませんか、と観客に呼びかけた。観客の中には日本人観光客もいたようだったが、ほとんどが外国人の男性観光客だった。私は中央にせり出した舞台の前の方に座っていたが、男はしばらく私の方を見つめていたかと思うと、不意に、‘Are you a Japanese? Come on!’と名指しされてしまったのだ。いくら‘No!’と断っても、その男は観客に拍手を促し、私を舞台に引っ張り出そうとした。隣の友人を見るとニヤニヤ笑いながら、舞台に上がってみてはどうか、とむしろ私にサンバの舞台に立たせたいようだった。会場では私が舞台に立つよう派手な拍手が鳴り止まなかった。友人は私が舞台に立つことは、この場の雰囲気上やむを得ないと思ったのか、或いは思い出作りのために私を敢えてそこに立たせようと考えていたのだろうか。最早逃げられないような雰囲気とプレッシャーを感じ

親しい友人を訪れ、おもてなしを受けた時のことである。彼との付き合いは、エジプトのピラミッドの近くで催されたサウンド・アンド・ライト・ショーという野外のディナー・ナイト・ショーで、偶々隣り合わせの席に座ったことがきっかけで始まった。アフリカから帰国して以降、年配の彼が数年前に天に召されるまで、半世紀近くに亙り交流を続けた。すっかり日本が気に入った友人は、ひとりで2度も日本へやって来た。最初は日光へ「はとバス」で案内し、2度目は車で富士・箱根巡りをして自宅にも招いて家族を挙げて歓待した。医師で独り身だった



リオのサンバ・シアターで  
サンバを踊る筆者

た。

よし！ここは正念場だ。一丁やってやろうじゃないかと開き直った。惨めな姿を晒してもどうせ知合いの日本人は誰もここにはいやしない。ふらつく足で舞台へ上った。踊りなんて幼いころに父親からふざけながら♪炭坑節♪を教えてもらった程度だ。ましてやサンバなんてそれまで1度も踊ったことがなかったので、清水の舞台から飛び降りる覚悟だった。続いて1人の歌い手が舞台上がった。すぐサンバの演奏が始まった。司会者の手拍子でサンバのミュージックに従い、歌手も唄った。「ダンサー」の私は、観客席の奥の方で踊っている女性ダンサーを見様見真似で、ひたすら腰をくねらせ、手足を前後に振り身体を上下させながらリズムを取っていた。

ところが、思いも寄らずリズムに乗り、程良い気分ですんば・ダンサーになったが、踊っていたのはほんの僅かな時間だった。それでも無事踊り終えることができホッとした。それが意外にも満場の観客から受けて喝さい？を浴びてしまったのだ。司会者の男性や歌手、場内の観客から一斉に拍手と歓声をもらった。ブラジルの友人も上機嫌で、‘You are a good SAMBA dancer.’とお世辞まで言われた。

しかし、あの時のサンバの舞台を振り返ってみても、未だに私の感情の中には恥ずかしいという気持ちが消えていない。それでもこれは遥々2万kmの旅をしてやって来た私に対して、わざわざアレンジしてくれたブラジル人の友情溢れる思い出作りのお土産だったに違いないと有難く思っている。